

書 評

C. W. Nicol, *Harpoon*
 (André Deutsch, 1987, London)

村上博基 訳『勇魚 (いさな)』

(東京: 文芸春秋社, 1987)

宮 井 敏

このところ fiction の世界での国際交流が著しい。1966年以来、日本文学者アイヴァン・モリス、コロンビア大学教授と結婚していた夫人が1971年の離婚後、ロンドンの演劇プロデューサー、サー・ドナルド・アルペリイ氏と再婚し、現在では女流作家、レディー・ノブコとして知られているが、しばらく前、英文小説 *The Balloon Top* (André Deutsch Co. 1978) を書いて、書評欄の絶賛を浴びたことがある (Frank Tuhoy による。『タイムズ文芸付録』, 1978, July 28)。神戸六甲の中流家庭からミッション・スクールに通った主人公が、早稲田大学に進み、過激派のボーイ・フレンドと共に60年安保を経験し、深く傷ついて挫折した後、その後の人間的成長と共に、厳格な躰けを強制するきびしい母親の呪縛からも、ボーイ・フレンドの radicalism からも、やっと解放されて、主体的な自我に目覚めて行くと言う半自伝的な筋立てであるが、「戦前の日本を理解させてくれる丈でなく、主人公カナコを通して日本女性の繊細さと強さとを、冗長に流れる事なく書き切った」として評判も良く、「敗戦とマッカーサー占領体制が日本をどう変えたかを、初めて英文で具体的に教えて呉れた」と称賛されたのである。

今年一月には、英国に帰化した作家カズオ・イシグロ氏がイギリスでも最も賞金の高い Whitbread Prize を *An Artist of the Floating World* (Faber)

という作品で受賞した。氏はすでに前作の処女長篇（邦訳名『わたちの遠い夏』，小野寺健訳，筑摩書房）で好評を博していたのであるが，その後英国籍を取得してこの快挙となったものである。六歳で両親と共に渡英，Grammar School から Kent Univ. を卒業，East Anglia College の Graduate School で創作のコースに参加していると云われる。日本語は日常会話程度と云う事だが，処女作，受賞作ともに登場人物，舞台はすべて日本を中心としており，『タイムズ文芸付録』は，「日本の水彩画のように繊細な描写である」と評した。第二次大戦中に日本政府に協力して，日章旗を銃剣であしらった戦意昂揚の多くの絵画で名をなした老画家が，戦後その罪で糾弾され，自信を喪いながらも自分は常にその時々最善の道をえらんだのだと思いかえし，後に続く若い世代に期待をかけるところで話は終わっている。

少し変わった所では二人のカナダ人女流作家の二つの作品，（Ann Ireland: *A Certain Mr Takahashi* と Sara Sheard: *Almost Japanese*）（前者は文学新人賞受賞）がいつでもカナダのトロントを舞台にしたものだが，現在トロント交響楽団・音楽監督兼指揮者，小沢征爾氏をモデルにしたものとしてしばらく話題を呼んだ。

さて，当然の事ながら以上の逆のケース，つまり，海外を舞台として描いた日本語の受賞作品はかなりの数にのぼる。とは云うものの，はじめは日本のなかの外国，つまり米軍基地とその住人を文学状況としてとらえるものから始まる訳で，昭和二九年度芥川賞の小島信夫『アメリカン・スクール』を嚆矢として同五一年度同賞，村上竜『限りなく透明に近いブルー』，六十年文芸賞，山田詠美『ベッドタイムアイズ』と続く。

一方，これと併行して日本向け滞米文学が生まれ，四三年度芥川賞，大庭みな子『三匹の蟹』，五四年度同賞，森礼子『モッキングバードのいる町』，六十年同賞，米谷ふみ子『過越しの祭』などが挙げられる。

アメリカ以外となると，五四年度同賞，青野聡『愚者の夜』などは，オランダ女性を妻とした日本青年のヨーロッパから中近東，日本への遍歴を描い

たもの、同年同賞候補の森礼子『誘惑』は英国人の夫と共に夫の生まれ故郷を旅する日本女性の行状記、などである。

さらに、第一回群像新人長篇小説賞、土居良一『カリフォルニア』や、同賞受賞、芥川賞候補の村上春樹『風の歌を聴け』などになると、まるで翻訳小説のような読後感を与えるが、事実、後者の如きははじめ前半部まで英語で書いてみた、と云われている。

以上、一応権威ある文学賞を受賞した水準以上の作品を中心としてとり上げて見たが、英語で書かれた日本や日本人を中心にした作品と、日本語で書かれた海外を舞台にした作品とは、どんな意味からも陽画と陰画の関係に立つものでは決してない。上記米谷作品などは六一年六月号の『翻訳の世界』で、イリノイ大学助教授、David Goodman 氏によって手厳しく批評されている。つまり、「日本語で書くと云う事は日本人以外には読まれない事を前提としており、この微妙なニュアンスがわかってたまるかと云う姿勢」が最初から潜在しており、一言で云うと、「屏風の陰で書いている」ようなものではないか、と云う。「その屏風はすでに（国際化の進行によって）穴があいているにもかかわらず」。

では、「鯨取り」と云う壮大なスケールの小説が、「屏風の陰」で書いている日本国内のアメリカを舞台にした小説群や、日本向け滞米文学にどのようなインパクトを与えて、「穴をあける」事になるであろうか。

知日派の作家、C. W. ニコルが世界八ヶ国同時発売という触れ込みで、今年四月世に問うた幕末冒険小説、*Harpoon* (邦訳名『勇魚 (いさな)』) (村上博基訳、文芸春秋社) は、外国人の手になる、日本を舞台にした時代小説と云う点で、James Clavell の *Shogun* (McClelland & Stewart Ltd. 1975) 以来の出来事であり、その点、hardcover, paperback 合せて八百万部 (邦訳名『将軍』、宮川一郎訳、TBS ブリタニカ社、では六三万部) を売ったというかつての話題作に些かでも迫る事が出来るかどうか、注目されるところである。

『將軍』はアメリカ、パラマウント社の手でテレビドラマとなり、1980年9月に五夜連続、全十二時間にわたって放映され、最高69%に達する驚異的な高視聴率を記録し、のべ一億三千七百万人のアメリカ人が見たといわれており（日本では1981年3月に朝日テレビで八夜連続の放映で平均視聴率27.6%を示した）、戦後三五年の間に積み重ねられたアメリカ人の対日理解の総量とほぼひとしい情報をこの一作で与えた、と云われている。又、平易な英語で書かれた原著が日本国内の洋書取次店で飛ぶような売れ行きを見せ、英米文学関係者以外のかかなり多数の日本人が読者として直接原作にふれたと云う事も、翻訳文学全盛の折柄、特筆すべき事柄だったと云えよう¹。

さて、さきにもべた村上春樹「風の歌を聴け」は Kurt Vonnegut を意識して執筆されたと云われており、昭和四三年度芥川賞の庄司薫『赤頭巾ちゃん気をつけて』は J. D. サリンジャーの強い影響下にあるとされている。丁度逆の形でこの『勇魚』の場合は同じ鯨取りを舞台にした昭和五三年度直木賞受賞の津本陽『深重の海』の撮取と受容とによって、外国人の手になる英文時代小説を日本の小説市場に導入させた訳であるが、現代文学が言語と民族のバリエーションを越えてつながって行くものとして、極めて興味深い出来事である。

著者、C. W. ニコル氏は1940年ウェールズ生れ、1960年カナダへ移住、その後海洋哺乳動物の専門家の資格で環境庁の技官となり、1966年には I. W. C. (国際捕鯨委員会) の申合せによるカナダ政府派遣の捕鯨監視員として日本の南氷洋捕鯨船団に乗り組み、1975年の沖縄海洋博にはカナダ館副館長をつとめ、1978年からは捕鯨基地の和歌山県太地町にも一年間住みついた。この間、十二回にわたる北極探検とエスキモー人と生活を共にした体験を素材にして、カナダエスキモー、イヌイットの世界を描いた長篇小説 The White Shaman (1979) (邦訳名『ティキシィ』角川書店) によって Shell Book Award を受賞、作家としての立場を確立したが、ついに今年に到って鯨取りの一大長篇叙事詩『勇魚』を完成させたものである。

彼が厳しい鯨類保護の国際世論の中でまさに袋叩きにあっている日本捕鯨の実情を小説にして公平な立場から世界に紹介しようとした動機は、三ヶ月にわたる国際捕鯨監視員としての日本捕鯨船団乗り組みの期間、国際捕鯨委員会規則の違反が皆無であった事にある。又脂肪と鬚状の鯨歯を取るのみで、膨大な鯨肉は全部海中投棄していた諸外国の捕鯨とは違って、肉、油、筋、骨、鬚等、鯨類のすべてを無駄なく利用している日本捕鯨の実体にはじめて触れて、大型海洋哺乳類研究の専門家として、鯨類保護絶対論者であった筆者が次第に日本捕鯨擁護に傾き、構想を練ること八年、取材・調査に四万ドルを費してようやく脱稿に漕ぎつけたものである。

とは云い条、「反捕鯨」ならいざ知らず、「捕鯨擁護」の内容では、と英米の出版界から作品の文学的価値とは無関係なりアクションがあり、上梓に至る迄かなりの迂余曲折を余儀なくされたと言う事も現在の国際的な、とりわけアメリカ国内の反捕鯨ムードのはげしさを物語っている。『いさなとり』と云う言葉が「海」や「浜」にかかる枕言葉であった時代からおよそ四百年の歴史をもつ日本の捕鯨業は I.W.C. の商業捕鯨全面禁止決議に基き、日本共同捕鯨所属の捕鯨母船、第三日新丸が本年四月十三日、東京湾大井埠頭に接岸した時をもって実質上のピリオドを打ったわけである。作者はこの全面的敗北を、反日の政治問題として捉えずに、文化、とりわけ食文化の問題としてとらえた日本側の対応の失敗と見る。(『C.W. ニコルの海洋記』竹内・宮崎訳、実日選書、昭62年)

そもそも、カナダ、アメリカ国内の反捕鯨運動の中核となった Friends of the Earth や Green Peace などラディカルなエンバイロメンタリスト達の組織はベトナム紛争終了以後の反戦運動の目標喪失を環境運動で埋めようとして、日本商品ボイコットの産業から、又公害問題から社会の眼をそらせたい公害企業からひそかに資金援助を受けつつ、人種的偏見と経済的嫉妬の反日感情を巧みにあふり、大型動物に寄せるセンチメンタルな動物愛護の大衆感情に媚びて、日本捕鯨を攻撃して来たわけである(拙論「研究ノート、

いるかとくじら——欧米の生命観批判——」同志社大学人文科学研究所『社会科学』第28号，1981年3月）。主として英語圏内の国際与論の操作に巧みなこうしたプロの運動家に対して，まだまだ国際社会の舞台裏の掛け引きに不馴れな，非英語圏内で孤立無援の日本が到底太刀打ち出来る筈もない。他民族の食文化の伝統に対して一顧の配慮も払おうとしない欧米人特有のエスノセントリズムに対して，極めてナショナルな感情と被害者意識から，狭い日本国内だけでいくら悲憤慷慨してみても，果してどれだけの効果があるだろうか，在日外人としてはたから見ての筆者の義憤と問題意識はほぼその辺にあったと見てよい。合せてこの際，Herman Melville の *Moby-Dick; or, the Whale* (1851) 以来のくじら小説を書いて見せようという筆者の狙いは果して成功したと云えるであろうか。

元来，日本の捕鯨は，作中冒頭にも紹介されているように，慶長十一年（1606）紀州太地の豪族和田頼元が五組の刺し手組を組織して，船団を組んで熊野灘に乗り出したのが始まりとされているが，その孫頼治が画期的な網取り法を考案し，西鶴が『日本永代蔵』の中で「紀伊に隠れなき鯨えびす」と描いたほどの繁栄を続けていた。1820年に到って，上海から東に向ったイギリス商船が日本沿岸沖の捕鯨漁場を発見，世界に知られるようになった訳である。（Herman Melville: *Moby-Dick or the Whale*, Henricks House, N. Y. p. 441）

その後，弘化三年頃（1846）からアメリカを中心におよそ700隻の近代的装備をそなえた捕鯨船が日本近海に殺到して乱獲をつづけ，旧式な日本捕鯨では到底太刀打ち出来ず，鯨資源の急減と共に太地の網打ち漁法は潰滅するに至った。作中ではアメリカ捕鯨船と日本のくじら舟の偶然の海上の出会いを描いており，これが後のプロットの展開上の重大な伏線となるのであるが，この頃のアメリカの捕鯨船735隻，鯨産業従事者7万人，これが一団となって議会に対する院外活動をおこし，政府をして捕鯨船の薪水補給のため，日本に開国をせまらしめるきっかけとなったのである。（*ibid.*, p. 109）

さて、さびれゆく太地の町を後にした鯨取りの主人公は海外に脱出、時代は大きく転回して明治維新となり、新式のアメリカ捕鯨船の航海士として帰国するが、その間井伊直弼、佐久間象山、吉田松陰、西郷隆盛が登場すると云う、スケールの大きい歴史冒険ロマンとなっている。

外国人の手になるこの英文長篇時代小説の中心となる回転軸は、従って、敬愛の念をこめて捕鯨に従事し、一切の鯨資源をすべて無駄にしないという日本捕鯨に対する作者の限りない愛惜の情と、近代化と伝統産業の相克、後者の敗北という図式であろう。その意味では、刃刺という鯨とりのスターが鯨の為に片腕を失ない乍ら、鎖国の日本を脱出し、維新開国後の日本に最新式アメリカ捕鯨船の航海士として帰国するという形は、この図式を象徴するものとして全篇を貫く太い芯となっており、構成上無駄なく、成功しているといえる。

しかし乍ら、日本捕鯨の国際世論の前の敗北は果してすべて理不尽なキャンペーンの前に力づくでねじ伏せられた、とのみ見るべきものであろうか。

たしかに、多くの家畜を殺し乍らどうして鯨とりのみを攻撃するのか、とか、果して I.W.C. の構成、審議の過程は妥当、適正なものであったと云えるか、とか、そもそも日本の沿岸捕鯨を衰退に追いやったのはアメリカ捕鯨船ではなかったか等といった日本側の抗議はそれなりの説得力はある。又、結局大型鯨の油のみを狙うアメリカ式捕鯨では採算がとれなくなったから捕鯨反対にまわったのではないのか、とか、数年来の規制の効果で現にいくつかの鯨種は捕獲しても生存に充分なだけの頭数が目視されているではないかと云った反論も充分論理にかなっていると考えられる。

だがしかし、反捕鯨のキャンペーンがあまりにヒステリックで “human-iac” (“humane” と “maniac” の合成語) であるにせよ、一部文化人の neo-nationalism や、日本人特有の被害者意識だけでは「自然環境保護」と云う世界的な潮流はつかみ切れないのではなかろうか。つまりは捕鯨・反捕鯨の国際論争において、日本は各論によって個々の勝利は得たであろうが、

総論において敗北した、と云える。鯨の生存数にしても、広い南氷洋上の目視カウントが正確を期し難い事は素人でもわかる事であるし、一たん減少すれば大型動物ほど生息数の回復がおそい事も充分想像のつく事である。要するにくじら科学がまだまだ未成熟なために一切の試論のベースとなるべき基礎データが確定していないのが現状なのである。その上、伝えられる日本捕鯨企業による日本のジャーナリズムに対する操作の問題、I.W.C. 未加盟国による海賊捕鯨 Outlaw Whaling からの鯨肉購入の問題、狩猟肉食民族に固有のモラトリアムに対する農耕民族独特の認識不足、等々、国際的に信用を失墜しかねない weak point もいくつかある。結局、多くの問題点をはらむ反捕鯨側の攻撃の欠陥の指摘のみに終始することなく、むしろこれを逆手にとり、日本側の主体性によって大型海洋哺乳動物を含む自然環境保護にとりくむのが残された日本の道なのではなかろうか。

だとすれば、ほろびゆくものに対する作者の愛惜のおもいはそれとして、地球的視野に立って人と自然の共存の哲学がこの歴史ロマンの中に今一步あきらかに示されていたならば、と希うのは望蜀の願いなのだろうか。

注

- 1 ベトナム戦争当時のアメリカの苦悩を描いてベスト・セラーとなり Pulitzer 賞を受賞した David Halberstam の近著 *The Reckoning* は現在 best-selling を続けているが、本年五月、『覇者の驕り』の題で邦訳（日本放送協会出版部）が出されたが、六月、平行して原著の paperback が洋販出版（東京）と Avon Books (N.Y.) の共同出版で販売され初版一万部を売り切ったと云われる。